

**成果報告 3** リモートセンシングデータを活用した東アジア古代史研究

# 「リモートセンシングデータを 活用した東アジア古代史研究」 国際シンポジウムにあたって

吉田 愛

本成果報告は2013年11月16日に学習院大学にて開催されたシンポジウムの報告・コメント・討論を収録したものである。「リモートセンシングデータを活用した東アジア古代史研究」と題したシンポジウムは、2013年7月に文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として採択された「東アジアの歴史都市と自然環境—先端科学が拓く古都・長安学」プロジェクト（代表は鶴間和幸・文学部教授、運営は学習院大学国際研究教育機構。以下、長安学プロジェクトと称する）のキックオフイベントとして実施された。この長安学プロジェクトは中国・西安市にある陝西師範大学で開設した「国際長安学研究院」の海外拠点で学習院に置いてほしいという要請から始まった。陝西師範大学は中国歴史地理学で著名な史念海氏（1912年-2001年）が在職していたため、西安をはじめとした中国古都史、歴史地理学における中国有数の研究拠点である。長安学プロジェクト代表の鶴間和幸は1980年代から史念海氏との共同研究を始め、1997年-1999年には科研費基盤研究（A）「中国黄土地帯の都城と生態環境史の研究」（代表：妹尾達彦・中央大学教授）にてフィールド調査を実施。そのプロジェクトの研究成果として『アジア遊学』20号（黄土高原の自然環境と漢唐長安城、勉誠出版、2000年）を刊行した。史念海氏が逝去された後も、交流は続き、日本学術振興会・頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「リモートセンシングデータを利用した黄河流域の歴史と環境」国際研究プログラム（2010年-2012年、代表：鶴間和幸）では学習院大学と陝西師範大学・復旦大学との間で若手研究者の相互派遣をおこなった。このような研究交流のなかではじまったのが長安学プロジェクトである。

現在、長安学プロジェクトでは2つの研究をすすめている。第1のテーマは陝西師範大学および東海大学情報技術センターとの協力による衛星データを活用した漢長安の研究である。これは『宇宙と地下からのメッセージ—秦始皇帝陵とその自然環境』（鶴間和幸・恵多谷雅弘監修、D-CODE、2013年）にておこなった秦の始皇帝陵・エジプトのピラミッドの調査

方法を応用し、古都・長安などの都市とそれを取り巻く環境を調査するものである。もうひとつが、陝西省考古研究院および東京農業大学との協力による DNA 分析を利用した人間と動物の関係史である。こちらは客員研究員の菊地大樹氏らが中心となって長安周辺の墓葬の馬骨の分析を進めている。いずれも文系と理系のコラボレーションによる取り組みである。今回のシンポジウムは第1のテーマに関連しておこなったものである。

本シンポジウムに際しては、公益財団法人エプソン国際奨学財団の助成を得て、孫涛氏（復旦大学）、潘威氏（陝西師範大学）の2氏を招聘した。孫氏は復旦大学の GIS プロジェクトのスタッフとして10年ほどのキャリアを有する。歴史自然地理・地図画像処理など技術的な側面を専門とする。今回の報告では「歴史地理研究における GIS の応用—1855 年黄河下流古河道復元の実践」と題した報告をおこなった。孫報告に対して、リモートセンシングを活用した歴史地理研究を試みている長谷川順二氏（学習院大学）と現代中国史研究者である河野正氏（日本学術振興会）のコメントをいただいた。もう1人の報告者である潘氏は復旦大学の満志敏教授の指導のもと、GIS を利用した歴史地理研究をすすめてきた。2009 年より陝西師範大学にて研究を開始し、現在では東アジア地域の気候変化と自然災害、中国歴史地理情報システムを専門として研究している。今回は「GIS と中国史における水文変化の研究」と題した報告をお願いした。潘氏の報告に対しては GIS の人文研究への応用の視点から松永光平氏（慶應義塾大学）にコメントいただいた。

本シンポジウムから約1年が経過した。長安学プロジェクトは陝西省考古研究院との共同研究も順調に進みつつあり、また、東海大学とのリモートセンシングを利用した歴史研究も都市・長安のみならず周辺の陵墓・陵邑・橋梁・水利施設などへと対象も拡大し、さらに、黄河流域やエジプトのナイル流域との比較研究も始まっている。

（よしだ あい 学習院大学国際研究教育機構 PD 共同研究員）